



テレビを
見ない人

川崎ゆきお

「えっ、テレビを見ていないのですか」

「あ、はい」

「新聞は」

「これはかなり前からってません」

「雑誌とかは」

「買ってません」

「じゃ世の中の動きが分からないでしょ」

「そうですねあ」

「困ることはありませんか」

「あるんですが、よく分かりません」

「じゃ、ニュースなどはどこで知のですか。身近な人からですか」

「いや、近所付き合いもしていませんし、友人知人も、殆どいません」

「じゃあ」

「ネットを見てます」

「ああ、なるほどねえ」

「ニュースは見ていますが、見出しだけで中は読んでません」

「どうしてですか」

「見出し以上のことが書かれていないし、それにいやなことばかりでしょ」

「しかし、情報が少ないと」

「いやいや、もう使う場所もないですよ。世の中に出ていませんからねえ。こうして世間話をするのも希ですよ」

「日頃、殆ど喋っておられないのでは」

「ああ、そうですねあ。しかし、言葉は忘れないものですねあ。単語はたまに忘れませんが、これは滅多に思い出さないような言葉が多いです。人の名とか、地名とかね。たまに思い出すと、しばらく持ちます」

「世の中のことが分からなくなりませんか」

「だから、ネットで見出しを見ているので、おおよそ分かっていますよ。でもあれって、駄目ですねえ。本当のことは別にあるので、いくら詳しく記事を読んでも、駄目でしょ。書けないからですよ。だから、いくらそんなものに通じていてもねえ……」

「確かに公表出来ないことはあると思いますが、何となく分かるんじゃないですか」

「知ったからといって、何ともならんでしょ」

「まあ、一応知識とか、常識として」

「はいはい、しかしそれを使う場がなくてねえ。だから、必要に迫られないのですよ」

「本当は知ってなければいけない情報もあるでしょ」

「電話がかかってきます。そういうときは」

「あ、はい」

「あなたと、今日お会いした」

「はい」

「テレビを見てるかどうかの話だけでしょ」

「ああ、はい」

「差し迫ったことがない証拠ですよ」

「あ、はい」

「特にないでしょ。私に伝えなければいけないようなことなんて」

「そうですねえ」

「まあ、来るときには来ますよ」

「な、何がですか」

「とんでもないことが」

「はい」

「これは逃げられないことが多い。知っていてもね」

「何か不安なことがあるのですか」

「世の中のことはあなたの方が詳しいでしょ」

「はい」

「私はもう世の中から引退した身ですので、後は気分良く過ごすだけです。いけませんか」

「いえ」

この老人が昔、テレビニュースの解説者だったとは、とんと見えない。

了